



ジョット作(1303-6)スクロヴェーニ礼拝堂

イタリアのパドヴァのスクロヴェーニ礼拝堂の天井にジョットによって預言者の一人としてマラキが描かれています。マラキの手の巻物にはあなたたちが待望している主は 突如、その聖所に来られる(3:1)と記されています。また、その備えとして、大いなる恐るべき主の日が来る前に預言者エリヤをあなたたちに遣わす(3:23)とバプテスマのヨハネの到来をも告げました。マラキのこの預言は、その後400年に渡り、イエス様の時代まで、待望の思いで語り継がれていきました。イザヤ、ダニエルと並んで、礼拝堂の真っ青な天井で星のように輝く預言者として、マラキはイエス様と母マリアの生涯の絵を見おろしながら、私たちにも語りかけているようです。

マラキ書はわたしはあなたたちを愛してきたと／主は言われる。しかし、あなたたちは言う／どのように愛を示してくださったのか、と。(1:2)という主と民の「対話」というよりも「言い合い」のような表現が何度も出てくる文書です。そして民が神に叱責されても、「自分には文句を言われる筋合いはない、証拠を見せよ」と言わんばかりの口ぶりで応酬する様子が記されているのです。マラキが咎める罪は具体的には「汚れた捧げものをしている」、「異教の神を信じる娘をめとっている」の二点です。この背景には、エルサレム帰還後、神殿再建は困難で、自分の経済を最優先していた民の生活がありました。異邦人が豊かな生活をして繁栄しているのに対し、我々は貧しい。「信仰生活は煩わしい、むなしい、何の益があるのか、悪事をして栄えている人のほうが幸いではないか、これで神に愛されていると言えようか」という不満があるのです。

マラキはまず、「神がヤコブを選び、愛した」という「神との関係・契約」に立つことが基本であると書き始めています。神の愛により生きる民であること、神と民は父と子の関係であることを教えています。父である神への敬意も畏れもなく、おざなりの礼拝、形だけの捧げものをしていることを指摘します。マラキは十分の一の捧げものをすべて倉に運び わたしの家に食物があるようにせよ。それによって、わたしを試してみよ、と万軍の主は言われる。必ず、わたしはあなたたちのために 天の窓を開き 祝福を限りなく注ぐであろう(3:10)と、神を試してもいいとさえ言って、十分の一の捧げものをするよう命じます。

特に民の指導者として選ばれたレビ族である祭司と最初に結んだ契約を思い出ささいといひます。その故事とはアロンの孫にあたる祭司ピネハスがミディアン人の女を娶った男を肅正したこと(民数記25:12)によって、イスラエル民族が出エジプト後800年以上にわたって生かされてきた現実を見よということでした。レビと結んだわが契約は命と平和のため(2:5)といひます。信仰を守り続けるために、肅正も断行しました。従って妻と離縁し、金持ちの異教の女を妻とする風潮は許されないと厳しく糾弾しているのです。中途半端で煮え切らず、言い訳ばかりする民に、マラキは「主は言われる」と何度も口を酸っぱくして言うかのように、忍耐強く、懇切丁寧に教え諭します。

最後に見よ、わたしは使者を送る。彼はわが前に道を備える。あなたたちが待望している主は／突如、その聖所に来られる。あなたたちが喜びとしている契約の使者／見よ、彼が来る、と万軍の主は言われる。(3:1) また、

見よ、わたしは／大いなる恐るべき主の日が来る前に／預言者エリヤをあなたたちに遣わす。彼は父の心を子に／子の心を父に向けさせる。わたしが来て、破滅をもって／この地を撃つことがないように。(3:23)と驚くべきことを告げます。最初の預言者であるエリヤが再びやって来て、神の心である愛を教え、民は神に真心から仕えるように備えをしてくれる。民は信仰に立ちかえって、神の前に正しい人として立つことができる。マラキは 義の太陽が昇り、あなたたちは牛舎の子牛のように躍り出て跳び回る と主の日の救いの喜びを表現しながら、民に希望の預言を語っています。